



天正かるた



tontokaimo39

「株札」と呼ばれる奇妙なカードをご存知でしょうか、主として関西方面で使われるカードですが、現在でもトランプや「花札」とともに大抵の玩具店で売られているゲームカード（実は賭博カード）です。

「株札」の前身には「地方札」と呼ばれる、これまた奇妙なカードがありました、「花札」なら季節の花や鳥が描かれているのですが、「株札」を含めてこの「地方札」の図柄はいったい何でしょうか。

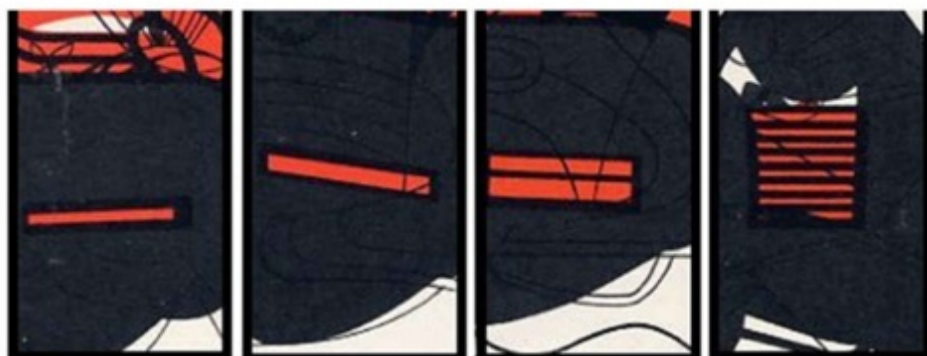
ここではこの「地方札」「株札」の図柄の正体について述べてみました。

*私のHPに掲載していたものをパブー向けに直したものです、本来は2ページ見開き表示のPDFなのですがパブーでは文字が小さくなってしまいますので単ページにしました、私のHPからダウンロードしていただくと2ページ見開きになります。



天正かるた

- 01 ポルトガルの竜
- 02 天正かるた
- 03 うんすんかるた
- 04 地方札
- 05 デフォルメの謎
- 06 紋票
- 07 株札を分解すると
- 08 オウルの菱形
- 09 オウルの2
- 10 赤八に戻って
- 11 参考図



はじめに

下の図を見てください。幼児の殴り書き、抽象絵画？実は「赤八」とよばれるトランプの仲間なのです。

ある長屋の大家さんが、店子の仏壇からキリシタンの護符を見つけて大騒ぎになったという記録があります。ところがよく調べて見ると「かるた」だった…もちろんキリスト教は厳禁だった江戸時代の話。

ところがある雑誌（ムック）で「青十は宣教師が立っている図、これもかなり崩れてお釈迦さんが立っているように・・・」という記述にであいました。書名は忘れたのですが「うんすんかるた」の女性について「本当は宣教師（パテレン）なのだが、服装から女性と間違えたのだろう・・・」というのも読んだ記憶があります。えっ、これあの大家さんと同じ…

日本古来の「かるた」類については、詳しく研究され、また珍しい札を所有されている方が幾人もいます。上の記述もそのような方のものだと思います。しかし待てよ、日本の「かるた」に宣教師などいたかな…？

トランプは海外から伝来したもの、少し海外に目を向けてみたら…という次第でこのような駄文を書く気になったのですが、私自身もそれ程知識があるわけではないし、手元の資料も貧弱なのですが、ここでは可能な限り海外のカードにも触れながら、この奇妙な「赤八」のルーツについて書いてみたいと思います。



「赤八」 主に関西で使用されていた地方札。左から二枚目が棍棒の10に当たる札で、古くは青色に塗られていたため「青十」釈迦のように見えるので「釈迦十」などとよばれていた。（ただし、「赤八」に限ってのよび方ではありません。）

ポルトガルの竜

1543年、種子島にポルトガル船が漂着します。有名な鉄砲の伝来ですが、これを期に始められた南蛮貿易、その珍奇な南蛮の品々に混じって、カードゲーム（トランプ）が渡来します。これがいわゆる「南蛮かるた」日本人が初めて目にした「かるた」でした。

当時のポルトガルのカードは、他の国では珍しいいくつかの特徴を持っていました。そのひとつが、1のカードに西洋の竜を描いていること、そのためこのカードは「ポルトガルの竜」あるいは「ドラゴンカード」といわれます。また、10の札が女性であること（普通は男性の従者）、棍棒と刀剣の女性は、竜と戦っている勇ましい姿であること、棍棒の2の札には人物を加えること等々。

西洋にトランプが現れたのは14世紀前半のイタリアとされているのですが、14世紀も後半になると、ヨーロッパのほとんど全域に普及します。その普及の過程で生まれたのが「ポルトガルの竜」1から12の48枚組、スーツはスペイン型の貨幣、杯、刀剣、棍棒ですが、イタリアの影響も強く受けているといわれます。



残念ながら、実物が残存していないために当時のカードは見ることはできません。左は唯一残っているものの一部ですが、完成前の1枚刷りで破損がひどく、この図以外は絵柄の想像も難しい状態です。

右はジャワのカード。当時海洋を支配していたポルトガルは、東洋の各地へ、南米へと「ドラゴンカード」を伝えます。



ポルトガル本国は、一時カードメーカーが全て倒産、ベルギーなどからの輸入品に頼っていました。19世紀に新しいメーカーが現れますがこの際採用したのはフランス式のカード、「ポルトガルの竜」は完全に消滅しています。図は19世紀のベルギー製、竜と戦う勇ましい女性は、犬を殴る、何もしない、と、平凡な姿になってしまいます。



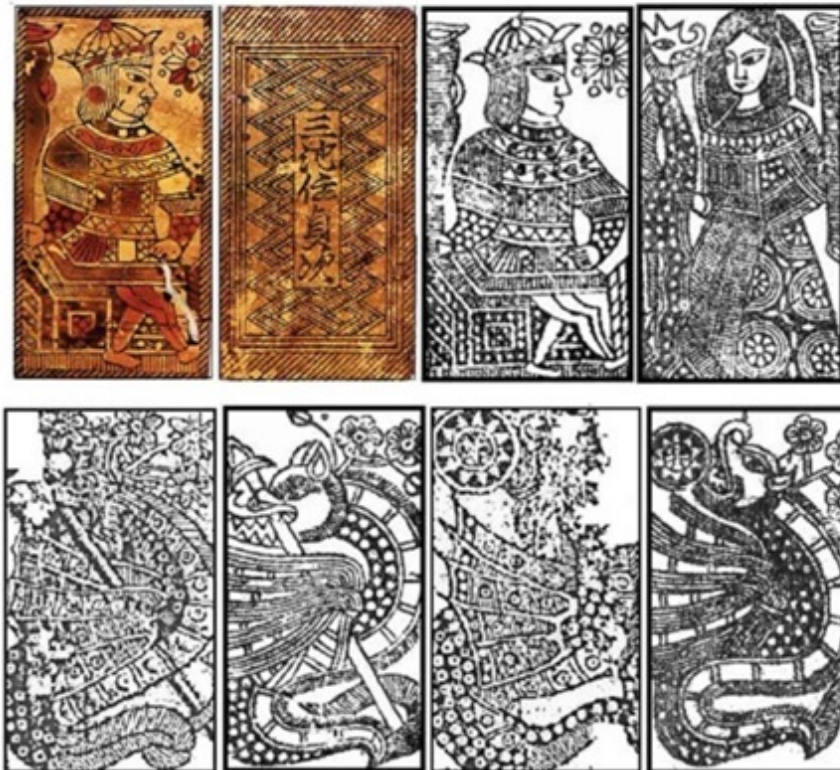
これも19世紀の「ポルトガルの竜」です。日本へ伝来したころのカードの重厚な味はありませんが、竜と女性という特徴はなお生きています。

天正かるた

「南蛮かるた」を模倣した国産のかるたを「天正かるた」といいます。もちろん当時そんな区別があったわけではなく、おそらく舶来、国産ともに「かるた」とよばれたのではないかと想像されます。「かるた」というのはポルトガル語の *carta*、カードのことです。

当時の「天正かるた」は棍棒のキングがただ1枚、神戸の滴翠美術館に保存されています。この札の裏には、「三池住貞次」の文字があり、三池（福岡県大牟田市）は、国産カードの発祥の地として、「三池カルタ記念館」が設立されています。

実物は1枚のみですが、重箱に加工された当時の版木（神戸市立博物館蔵）が残されているため、1デッキの全容を窺うことができ、復刻版もつくられました。これによって、1には竜が、従者は女性と「ポルトガルの竜」の忠実な模倣であったことが分かります。



上は左から現存最古の「天正かるた」、上記版木からの拓摺り（左右の反転は直しています）で、棍棒の王、竜と戦う女性従者。下は2頁に挙げた竜と拓刷りです。竜を比較すると本国のものとそっくりなことが分かります。

と、ここまできるともうお分かりでしょう。青十はバテレンではないのです。「うんすんかるた」の女性もバテレンの服装から間違えたわけではなくて、もともと女性なのです。

残念ながら、私は復刻版を持っていないので明瞭な図を掲載できないのですが、次ページの図は、この復刻版をまた模倣したアメリカ製のカード。かなり稚拙な模倣ですが「天正かるた」のおおよその姿を想像することはできると思います。



アメリカ産「天正かるた」三池カルタ記念館が版木から復刻したものの模倣です。

うんすんかるた

「南蛮かるた」の渡来からおおよそ100年後、「うんすんかるた」というのが現れます。しっかりと日本に根付いた「天正かるた」ですが、当然のように賭博のカードは禁止、これは洋の東西を問いません。そこに「48枚でなけりゃあいいんだろう！」と居直ったように登場したのが「うんすんかるた」で、グル（巴紋）というスーツを加えて5スーツ、さらにウン(福の神)スン(唐人)ロバイという1から独立させた竜の絵札を増やして合計75枚。(さらに弓矢のスーツを加えて97枚という「すんくんかるた」もつくられています。)

ところがこのかるた、あまり普及しなかったとみえて、使われた形跡がほとんどなく、それが幸いしたのか、当時のものがいい状態のままで幾組みか残っています。ゲームカードは破損したり旧くなると惜しげもなく捨てられるもの、このためこの頃の「天正かるた」をみることはできないのですが、これによって当時の姿を推測することができます。当然といえば当然ですが、王や騎士は鎧兜の武士の姿、竜は西洋のそれではなくて中国風の龍とすっかり日本風、しかし龍や女性と「ドラゴンカード」の特徴は健在です。

忘れ去られていたと思われていたこのかるたの遊び方は、熊本県人吉市に伝わり、県の無形文化財に指定され、最近では「うんすんカルタ大会」も開催されているとのことですが、「八人メリ」という8人で遊ぶゲームが中心で、「オンブル」という失われた西洋のゲームによく似ているということです。

私は「うんすんかるた」は婚礼用ではなかったかと推測しています。嫁入り道具の中に「貝合わせ」を入れる習慣があり、これは、ぴったりと合うのは1組しかないという縁起的な意味からでした。しかし、もと蛤の殻だった「貝合わせ」は、やがて木製へ、そしてカードへと変化します。これが現代の「いろはかるた」「百人一首」に繋がるのですが、当時嫁入り道具にカードを加えた、そこで48枚の「天正かるた」よりもより豪華な75枚のものが案出されたのではと推測するのですがどうでしょうか。使われた形跡がない。豪華なものが多い。また先の人吉市では「備前かるた」ともよび、これは備前藩の姫がこの地に嫁いで来たとき持参したためといういい伝えがあるそうですが、これも裏付けのひとつになるのではないかと思います。

これはあくまでも推測にすぎませんが、賭博に打ち興じる庶民の姿を想像するにはあまりにも豪華すぎる札であることは事実で、仮に遊ばれていたとしても上流階級のものであったことは間違いないようです。



グルの絵札

* 「48まいでなけりゃあ…」当時、かるたといわなくとも、48枚で通用したという。



現代の「うんすんかるた」ですが、原図はかなり初期のものを採用しているようです。

地方札

ゲームというのは、本を読んで覚えるという事はあまりありません。兄弟とか知人に教えられる、そのために同じ事柄がいつまでも継承され易い。ゲーム独特の保守性です。「天正かるた」も普及し、広まるにつれて様々なローカルルールが生まれます。ところがそのルールは変わることなく受け継がれる。こうしたローカルなルールに対応した札が地方札です。なにしろ禁止されている賭博札ですから、大手のメーカーも表立ってはつくれない、また当時の物品の流通状況から、札の製造そのものも地方でおこなわれる。こうして「天正かるた」は次々と変形を産み出して、中には4スーツは不必要だと1スーツになってしまったものも現れます。



図は18世紀の「雨中徒然草」という書物に載っている「天正かるた」で、木版本の挿絵のため正確ではないかも知れませんが18世紀の姿で棍棒（ハウ）の札です。左端は騎士、馬の四足がなんとか認められます、続いて王と従者、人であることは分かりますが、従者はもう女性とは見えないし、右の竜に至っては全く意味不明。地方札のほとんどはこうしたデフォルメが進み、「はじめに」で示した「赤八」が、幼児の落書きか抽象絵画のように見えるのはこのためなのです。



上の図に該当する「赤八」の札を並べてみました。従者は顔らしきものがあるのでなんとか人だと分かるのですが、後は本当に抽象絵画です。

* 「天正かるた」の札のよび方。ポルトガル、日本の順。

棍棒-paus-ハウ 貨幣-ouros-オウル 杯-copos-コップ 刀剣-espadas-イス

1-as-ピン 王-rei-キリ、コシ 騎士-caballo-ウマ 従者-sota-ソータ

* 「うんすんかるた」の中には、従者を男性として描いたものもある。



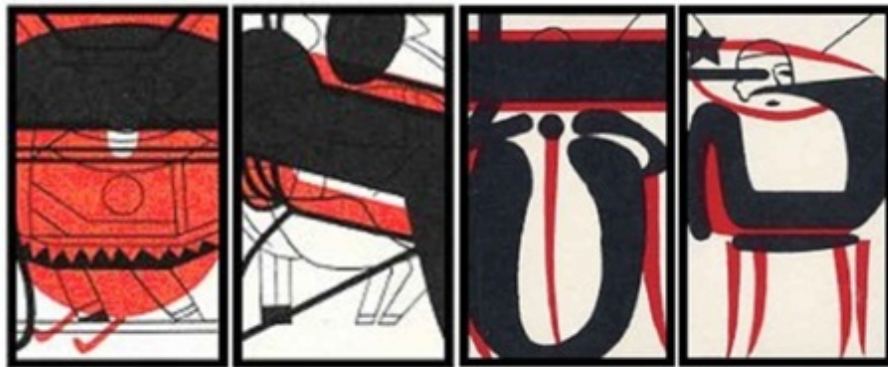
上から「黒札」「小松」「小丸」「入の吉」

デフォルメの謎

「赤八」のルーツをたどってきたのですが、疑問がひとつ残ります。それは、どうしてここまでデフォルメされてしまったかということ、騎士や王が鎧兜の武士の姿に、ここまでは自然なのですが、その後の変化には驚くというほかありません。これ程激しい省略や変形は世界に例がないのです。

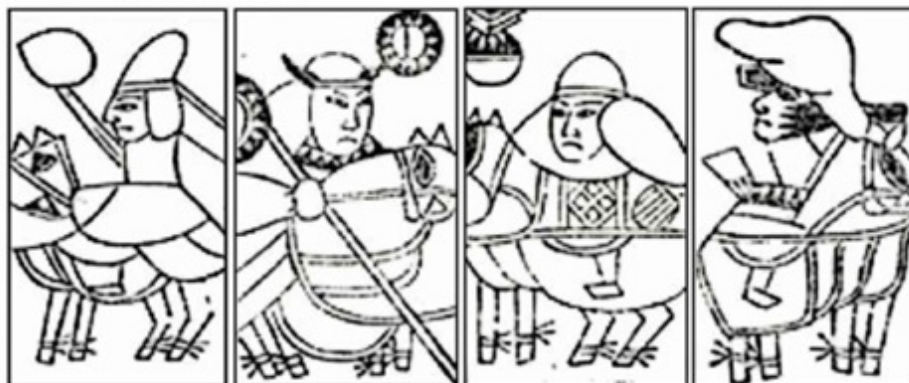
これについて、先の版で次のような仮説を述べておきました。1、粗末な製法のため。2、安価にするため製造過程の簡略化。3、キリシタンの護符等の誤解を避けるため。4、禁制の札を隠すため。

実はその際、ある推測をしていました。図は黒札と赤八ですが、黒札の方には明瞭に馬の足が見えています。ということは、黒い塗りつぶしの後ろにはまだ絵があるのではないだろうか…もしそうなら…ということでした。



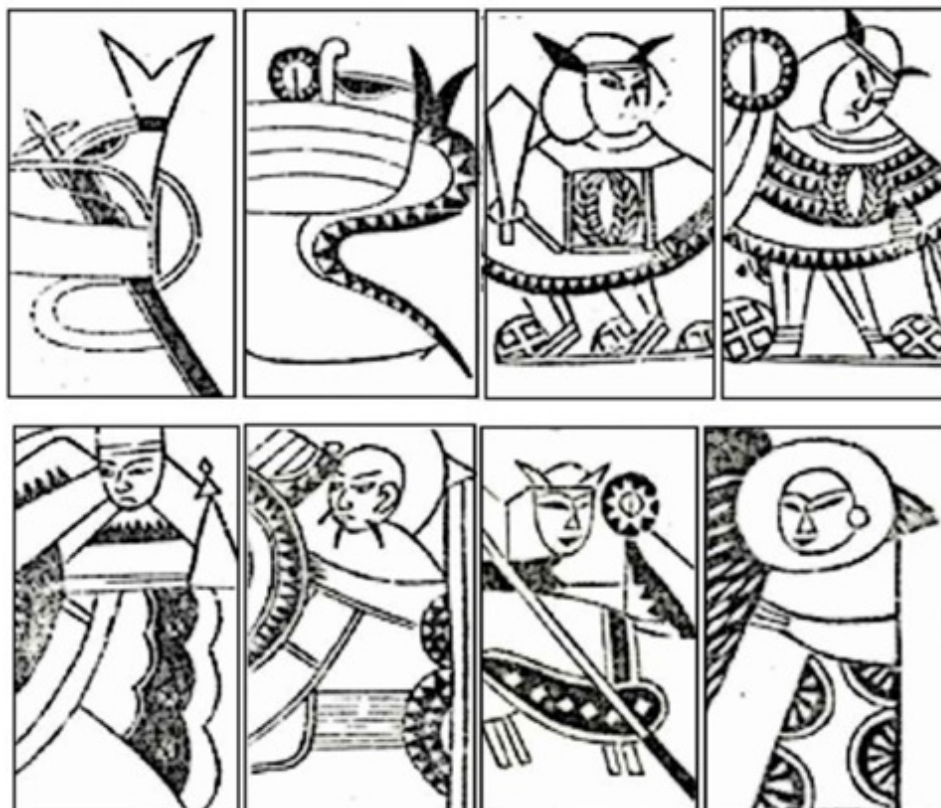
ある方に、地方札の骨刷を見せていただきました。予想通り、「黒札」の塗りつぶしの後ろには絵が隠れていたのです。これでデフォルメの謎が解けたように思います。

基本となる骨刷の上は、手書きだったのではないのでしょうか。そう思えば、黒も赤も筆書きの後にそっくりです。墨の濃淡にもよるでしょうが、下の絵はまだ見えていたのでしょうか。ところがこの手書き部分も絵の一部として版にしてみました。となると黒と黒で下の絵は隠れて、よくわからない抽象絵画のようになってしまう。これが奇妙な変形の原因で、上記の2ないし1が正解だと思うのですがどうでしょうか。図の「赤八」の場合、足は書き加えるために骨刷はただ顔だけになったのではと思います。



上の札とメーカーは異なるが、黒札の骨刷

ただし疑問が残らないでもありません。「黒札」にせよ「桜川」にせよ、こうした絵を残しているのは東北系、「赤八」など西日本系は崩れてしまいます。これは生産量の違いでしょうか。次に、こうした姿になったのはいつの頃かということです。おそらく木版から離れた明治以降と推測するのですが、特別な根拠はありません。強いていえば、「入の吉」や「金青山」に、「株札」と同様に地紋が使われていることです。



これ程激しい変形は例がないと書いたのですが、実は反対で、ドラゴンカードの特徴を忠実に受け継いでいる日本は、世界でも稀な国というべきなのかも知れません。* 下の左2枚は黒札、右は桜川ですが、なんとハウの従者が竜を掴む様子がなお描かれています。(黒札には髭が生えているようですが…笑)

明治になって、「花札」や「天正かるた」が解禁されます。これによって、カードゲームの爆発的なブームがおこり、地方札もかつてない隆盛をみたといえます。このブームに水をさしたのが明治35年の骨牌税の導入でした。なんと税額が定価のほぼ同額というのですからカードの売り上げは激減し、地方の弱小メーカーはたちまち廃業に追い込まれるのです。こうして地方札は次々ときえていき、京都を中心とした有力メーカーが、しばらくは地方の需要に応じていたのですが、これもまた徐々に生産を中止し、「花札」(これも地方札は消えて、現在は「八八花」のみ)「株札」を除く全ての札が姿を消してしまいました。

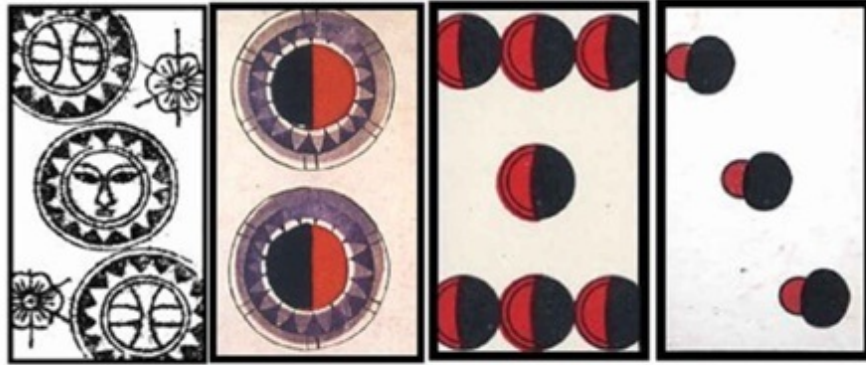
* ドラゴンカードは、ブラジル、インド、インドネシア、マルタ等に伝わっている。

紋票 (スーツ)

ここまでは絵札に拘ったのですが、スーツはどうなっているでしょうか。

貨幣(オウル)

渡来した「南蛮かるた」自体、円形の模様であったために、貨幣としての認識は無かったようです。穴あき銭になっているとおもしろいのですが。地方札は赤と黒に塗られた円になり、マメとよべれます。



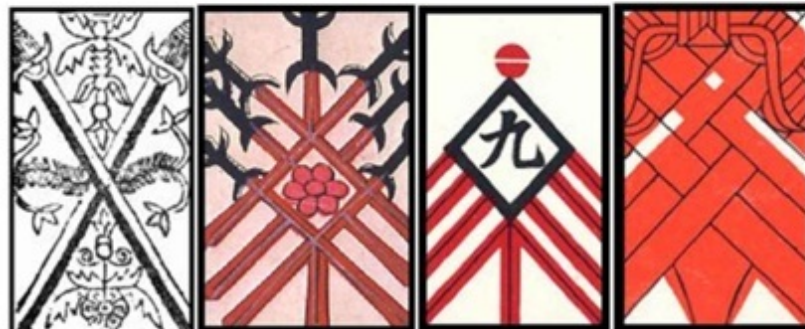
左から「天正」「うんすん」「赤八」「小松」



「小丸」「大二」「黒札」「伊勢」

刀剣 (イス)

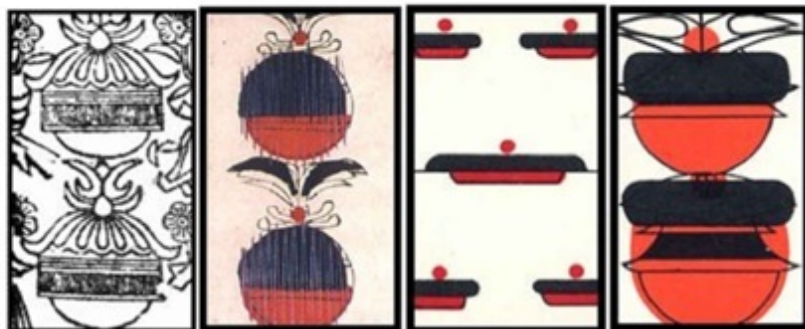
日本の刀とはかなり違いますが、これはそのまま刀剣と受け取られています。地方札になると棒状になってしましますが、これは赤く塗ることで棍棒のそれと区別しました。「黒札」はやはり刀剣の面影をよく止めているようです。



「天正」「うんすん」「赤八」「黒札」

杯 (コップ)

版木で見ると、渡来品も奇妙な形をしていたようです。ワイングラスなら、ギヤマンのコップとして認識されたと思うのですが。地方札になると扁平になってしまったものも見られますが、当時の人はこれを何と見ていたか知りたいものです。「黒札」といえば黒いばかりでよくわからない札という印象があったのですが、こうして見るとやはりよく原型を止めています。



「天正」「うんすん」「赤八」「黒札」

棍棒 (ハウ)

棍棒というのも日本人にはなじめなかったのでしょうか。「うんすんかるた」では花ともいって、実際に花を咲かせているのが愉快です。もっともスペインやイタリアの札でも枝や葉がついている札は珍しくなくて、よくいわれている「棍棒は脱穀用の棒のため農民を表す…」というのには眉唾です。(ついでながら、刀剣は武士、杯は聖職者、貨幣は商人というのにも歴史的な根拠はなにもなくて、後世のこじつけ、俗説に過ぎません。)



「天正」「うんすん」「赤八」「黒札」

- * 版木の「天正かるた」は国産品であるが、当時のポルトガルのカードがこうであったとみてまず間違いはない。
- * 「うんすんかるた」の現存するものは手書きであるため、図柄についての定まった形というのはない。後期のものほど日本的になっている。
- * 図は一応揃えてあるが、同一の大きさではない。「赤八」「黒札」「小松」等は現代の「花札」と同じであるが、「小丸」は名前の通りそれより一回り小さい。

株札を分解すると

現存唯一の「天正かるた」系の地方札が「株札」です。数十年前ですが、我が家に遊びに来ていた鎌倉に住む従兄弟が「あれ、花札買ってきたら変なものが出てきた。」という見せたのが「株札」でした。というのもこの札は、関西、中国地方で使う地方札、関東育ちの従兄弟にはなじみがなかったのです。ところが先年、東北自動車道のサービスエリアで見付けました。小樽のコンビニにあったというのを聞いたことがあります。



変な帽子を被った人物（10の札）は明らかに近代トランプの影響、ということはこの札の誕生は明治以降。7の札、これは棍棒が7本なのです。2から9まではこれと同様で、この描き方は、下の図をみてください。分からないのが左2枚の1、左端は特別札ですが問題は2番目、実はこれがドラゴンといったら信じられるでしょうか、ところがやはりドラゴン、「ポルトガルの竜」は、現代の日本の札に生きているのです。



「天正かるた」「うんすんかるた」「ドラゴンカード」「現代のイタリアの札」



再び「赤八」です。左3枚は竜らしく見えなくもないのですが、右端のハウだけはどうみても竜には見えません。どうしてこれだけが？



こうして並べてみると答えが見えてきます。「雨中徒然草」の札右下の妙な模様は竜のうろこ、左上の黒いところが棍棒、「赤八」の左上がその名残、右端は「伊勢」。赤八から伊勢へ変化したという意味ではないのですが、株札の分銅のような形になったわけがこれで納得できるのではないかと思います



ちなみに、他の地方札のハウの1を並べておきます。左から「小松」「入の吉」「黒札」「金青山」です。

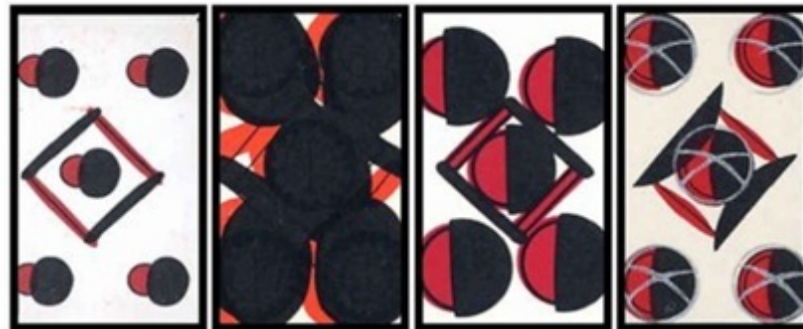
蛇足ですが、現在に生きている竜といえば、より竜らしく見えるカードがあります。それが「手本引き」の繰り札で、これはハウではなくてオウルなのですが、左端の「天正かるた」と比較してください。



- * 「株札」のカブは、ポルトガル語の8のこと。
- * 「株札」は明治以降の誕生だが、これの前身にあたる札はそれ以前からあり、「かぶかるた」などといわれていた。これももとは青色の札である。

オウルの菱形

オウルの5は、中央のひとつが菱形で囲まれています。これは何でしょうか？
 「重ねて手に持ったとき、少しずらしただけでは下の札が4なのか5の札なのかがわからない。そのため5には菱形を描き、4には横線を入れた。」といった趣旨の文を読んだのですが、なるほどと感心して、この菱形のルーツを探りたくなりました。

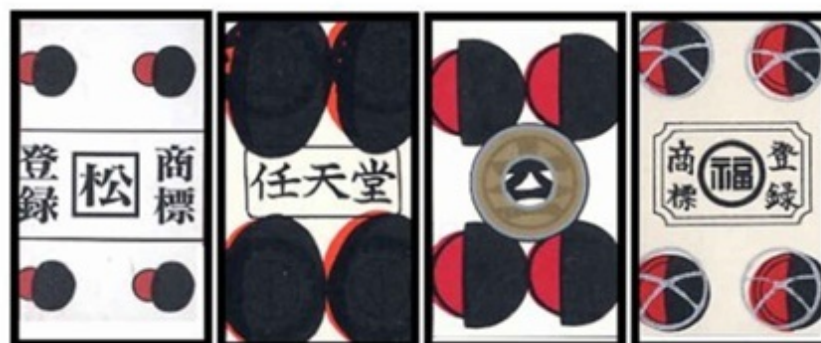


「小松」「黒札」「大二」「赤八」



「天正」と「ドラゴンカード」

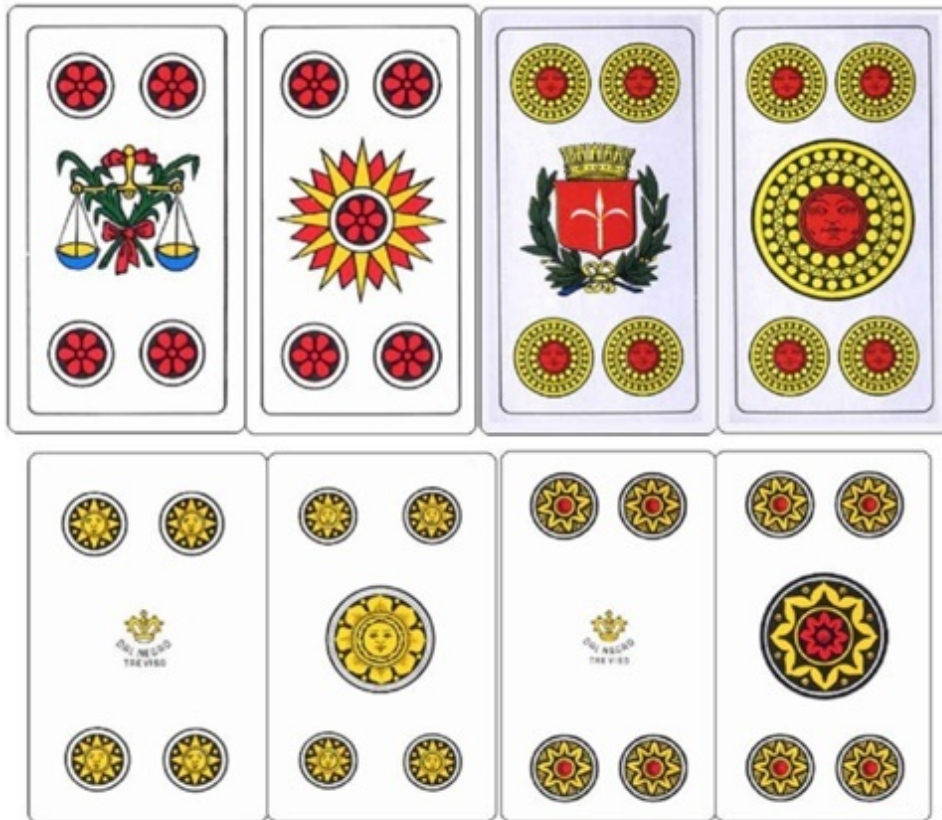
「天正かるた」にもあるということは、ポルトガルの札にもあったとっていいと思います。では例の19世紀の札は？これは菱形ではないのですが確かにそれに代わる装飾が、ということは、ルーツはやはり「ポルトガルの竜」でしょうか。



「小松」「黒札」「大二」「赤八」

「大二」は5ではなく、中央の円は装飾です。オウルの5は菱形ですが、4には横線や商標を、もしくは何らかの装飾を加える習慣があるようです。

少しずらしただけで分かるように、これはインデックスがあれば意味がなくなります。現代でもインデックスのないカードを使うのがイタリアなので、イタリアのカードを調べてみました、4と5の札です。



上は4のカードに装飾を入れた例、下は商標を入れたものです。5の札の中央はいずれも特別な描き方。貨幣だけでなく、コップもこのようになっているものがあります。



ヨーロッパでのトランプの発生はイタリアだといわれています。オウルの4や5の商標や菱形の本当のルーツはイタリアなのかも知りません。ただイタリアの場合、ずらして分かるためというより余白があるので飾ったという感じです。

* スペインのカードも同様になっていることが多い。

オウルの2

オウルにはもうひとつ奇妙な特徴があります。それが2ですが、これは何でしょうか？



「天正」とイタリアのカードですが、これも西欧の影響のようです。「天正」はポルトガルの札からですが、ポルトガルの「南蛮かるた」はイタリアの影響も受けているのです。

鬼札

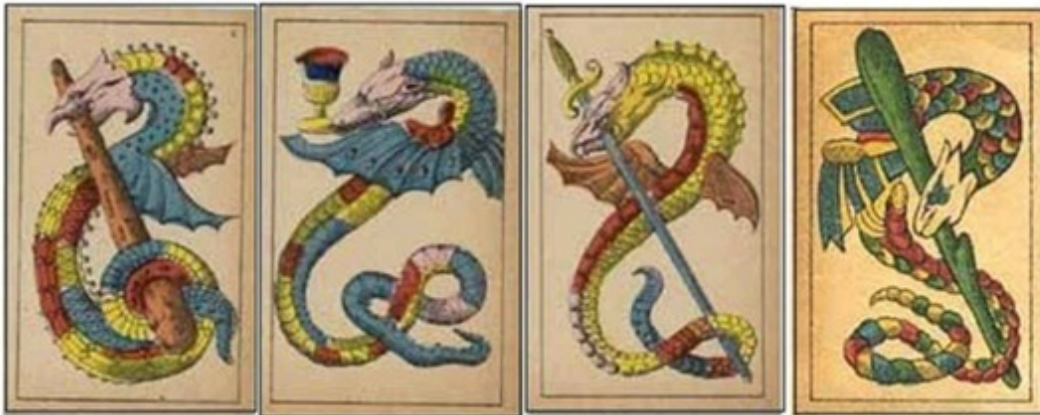


鬼札というのはジョーカーに相当する札ですが、日本独自の発生らしく、西欧のカードには見当たりません。数値によっては特別にデザイン、特別に彩色された札がありますが、これらはゲームとしての繋がりはあるのでしょうか、図象としての関連は薄いようです。

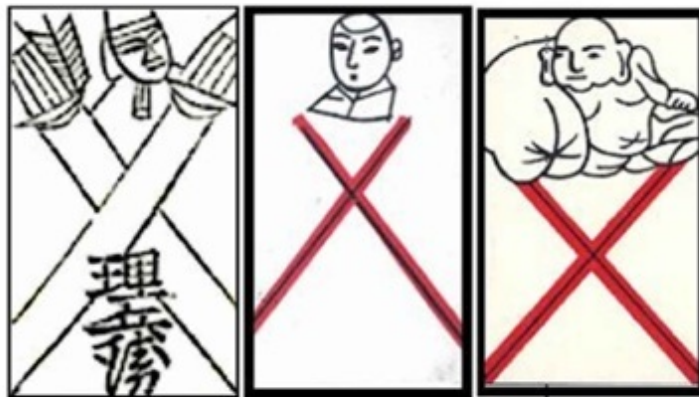
* タロットはフルールというワイルドカードを持っているが、トランプのジョーカーは19の発生。



棍棒の2には人物を入れるのが「ドラゴンカード」の特徴。



ポルトガル本国から消えてしまったドラゴン。現在どこで生きているか不明なのですが、(乞う御教示)「うんすんかるた」は復活したとのこと、(今のところ人吉市だけですが)日本は今尚このカードを使う貴重な存在ということになります。



棍棒の2の人物は、日本ではなぜか刀剣の方へ… (左から桜川骨刷、伊勢、赤八)「うんすんかるた」では、まだ棍棒です、いつから変化したのでしょうか？

* ドラゴン、棍棒の2に人物は、イタリア、スペインのカードにもまれに存在する。

赤八に戻って



「赤八」は、地方札の中で最も長く生き残っていたものだそうです。



こうして見ると、「天正かるた」の特徴を意外とよく受け継いでいます。



参考図

2 ページ

16世紀ドラゴンカード

http://www.wopc.co.uk/portugal/dutch_portuguese.html

ジャワのカード

Roger Tillei Playing cards

19世紀ドラゴンカード

筆者所有

3 ページ

19世紀ドラゴンカード

Museum in Alava

4 ページ

現存最古の天正カルタ

神戸滴翠美術館

天正かるた拓摺

神戸市立博物館

5 ページ

アメリカ製天正かるた

Mount Hood Playing Card Co

6 ページ

うんすんかるた

<http://www.wopc.co.uk/japan/unsun.html>

7 ページ

うんすんかるた

大石天狗堂

地方札 任天堂 大石天狗堂 松井天狗堂 矢船カルタ保存会
イタリアのカード Dal Negro

トランプミニシリーズ

内容は思いつき次第、何が出てくるかわからない…笑 何かおもしろいアイデアがありましたらお知らせください。



天正かるた

<http://p.booklog.jp/book/70919>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70919>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70919>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ